

評価の時代

先端基礎研究センター長 伊 達 宗 行

早いもので、当センターが発足して3年が終わろうとしている。そろそろ最初の評価期を迎える。そこで評価そのものについて考えて見よう。目的の明白な開発や応用研究は評価が比較的容易であるのに対し、基礎科学は評価がむずかしいという一般的傾向があり、安易な評価はそれ自体が問われることにもなるから事は重大である。

まず注意すべき事はその段階的構成である。特に日本では単色の思考になりがちなので注意を要する。評価は review, evaluation そして appreciation から成り立っている。全体を掘り返し、良し悪しを見分け、良いものの価値を決める、というプロセスが的確に行われねばならない。バーゲンセールの注意書きのようだが、上記3点のバランスを欠く評価報告書がけっこう多いようである。

大学院の重点化時代を迎え、大学の評価も盛んになって来た。そこでのキーワードは自己評価である。少しおかしき気もするが、review&PR、と思えばよいであろう。上記3条件の少なくとも1/3は充足される。まあ無いよりは良い。一方、いくつかの大学、研究所では外部委員、場合によっては外国人も入れた客観評価が進んでいる。筆者も東大、京大を初め10ヶ所近い評価委員会に引き出されたが中々面白いものであった。ある所では評価を“みそぎ”としか考えていなかったし、ある所では数日かけてじっくりと対応させられた。自信がある所程素直であり、実質的でしっかりしているのも自然なことだろう。評価の時代は確実に進んでいる。

日本では評価というと上が下を、との連想が走る。しかし学術における評価の焦点はピアレビュー、つまり同業者による評価である。学識経験者がそれにあたる、と言っても本質は変らない。ここが大切な認識である。行政の勤務評定とちがう点で、科学の最前線で

は同業者以外に理解できる者はいないからである。

そんな評価は信用できるのだろうか、と上下関係を重視する立場の人は思うかもしれない。ここが面白い所である。結論を言えば、科学者に天才から凡才まであるように、評価の天才は深淵までを一気に見抜く。まあ天才とまでいわなくても例えば大学教授を百人集めるとこの中の2~3人は卓越した評価力を持つ、というのが筆者の経験である。評価力は研究業績にかなりの相関を持つが必ずしも比例しない。大発見をした人が高い評価力を持つとは限らない。有能な人は、例えば科学研究費申請書100件を見るのに1時間もかけない。そしてこのような人を2人並べて見ると評価結果はほぼ一致している。眼光紙背に徹するとも言えるがむしろ感性の問題のようである。

このようなレベルまではまだよい。その上に行くと研究と評価はかみ合わなくなる。大発見は専門誌のレフェリーに拒否された、という多くの例がある。そして研究者と評価者の運命的な出会いが創造の世界を招いて行く。アンダーソンの助言なしにジョセフソンは無かったし、ランダウが居なかったらカピッツァは埋没したであろうと言われている。

そこまで行かなくても、である。我がセンターも最善を尽くして評価をせねばならぬ。どうするか。原研としての標準的評価に加えて基礎科学の核心につながるセンター独自の評価を行うことが社会的責任でもあろう。評価のポイントは、その研究が国の内外にどれだけのインパクトを与えたか、応用への展開をも含めてどのような広がりを示したか、原研の特徴およびリーダーシップが示されているか、などであろう。これらを表示し得る具体的諸項目も既に準備されている。

しかし最後に大事な仕事が残っている。それは、センター長は何をしたか、の評価である。